

音楽と物理の接点

板東 浩

演劇「アマデウス」を有楽町の日生劇場で楽しんだ。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト役は市川染五郎、サリエリには松本幸四郎。親子キャストのためか、舞台から複雑なメッセージが送られてきた。

モーツァルトは幼少の頃より旅人であった。ステージパパのレオポルドとヨーロツバ中を駆けめぐり、父と子の間に形成された特殊な心の絆。父親の存在が息子にとって大きなストレスだ。夢に父親が現れてうなされる。ミサの作曲を依頼する人の影は、現実なのか夢なのか。ステージでは、マントを纏った影を幸四郎が演じ、染五郎に精神的苦痛を与え続けたのである。

その苦痛が廻り回って還ってきたのか、数十年後、サリエリは精神病院にいた。モーツァルトの才能に嫉妬し、「モーツァルトを毒殺した」と自分から言い出した。この場面は、映画「アマデウス」の冒頭のシーンにある。ご覧になった方も多いだろう。しかし、当時、心を病むサリエルの言葉を、周囲は全く相手にしなかったとされる。

モーツァルトの死因を調べると病死説と毒殺説がある。当時の検死調書には急性粟粒疹熱と記されているが、リウマチ熱、心不全、尿毒症なども推測されているのだ。毒殺説には水銀中毒があり、秘密結社フリーメイソンや帝室劇場総監督のローゼンバーク伯爵の陰謀だという話も伝えられている。アマデウスの舞台は、ロンドンの初演から常に少しずつ進化し続けている。音楽の歴史も同様で、サリエリは当時の音楽を少し進化（evolution）させた。一方、モーツァルトは、進化というよりも大変革（revolution）を起こしたと言えるだろう。

近年、進化論が見直されている。以前には、ダーウインの適応説が知られていた。ジラフ（キリン）の首が長いのは、高い所にある餌を取ろうとしているうちに、次第に首が長くなったとする適応説である。しかし、中間の首の長さのジラフが見つからないことから、この説が疑問視されていた。様々な研究の結果、原因は遺伝子の突然変異によることが明らかになった。今や、従来の適応説は否定され、二〇〇〇年という現時点では突然変異説が最も有力である。

進化と寿命の関係はどうだろう。サリエリは秀才で適応能力に優れていたから、長生きをした。一方、モーツァルトは天才で、突然変異のような尋常稀な能力があったため、若く夭折した、とするのは言い過ぎだろうか。

「モーツァルトの音楽は神の音楽だ」と評した人がいる。宇宙の相対性理論を唱えたアインシュタインだ。博士は音楽を愛したバイオリニストでもあった。ドイツの特許許可局に勤めながら、自らの物理学の研究を続けていた。多くの人のアイデアに触れたことにより、彼の発想が進化し、地球にとって革命的な発見につながったものと思われる。

自然科学的に物事を見ることは、「神のパズルを解く」ようなもので楽しいと博士は言う。物理学の歴史は、アリストテレスが風呂の中で体が軽くなるという、日常生活の視点から始まった。次に、医学生のカリレオ・ガリレイが振り子の時間を計り、地球という巨視的レベルになった。その後、ニュートンが地球、月、太陽の範囲で万有引力の法則を提唱。以上の物理学の進化を、博士が大宇宙の次元でまとめたのだ。

物理学の天才であった博士だからこそ、音楽界の天才たるモーツァルトを理解し、評価できたような気がする。言い換えれば、科学を突き詰めると、芸術の究極の姿と近い存在になり、大宇宙も人間という小宇宙も、神もすべて同一になってしまうのか。今もなお、モーツァルトとアインシュタイン博士は、宇宙を旅しながら、異次元で熱く議論を戦わせているかもしれない。

（徳島大学医学部第一内科）